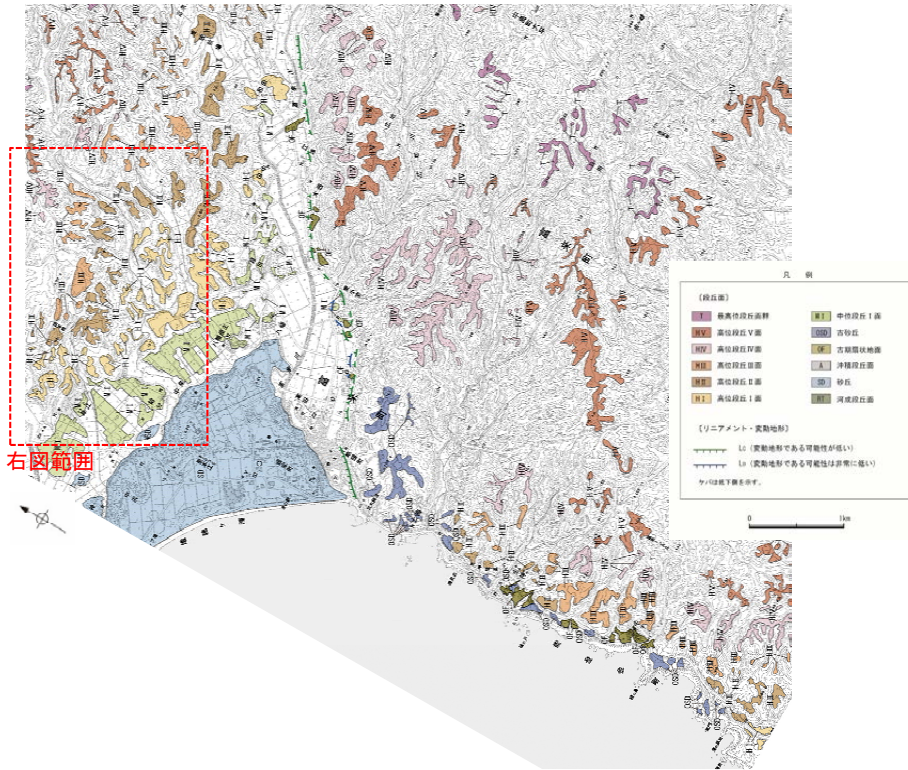


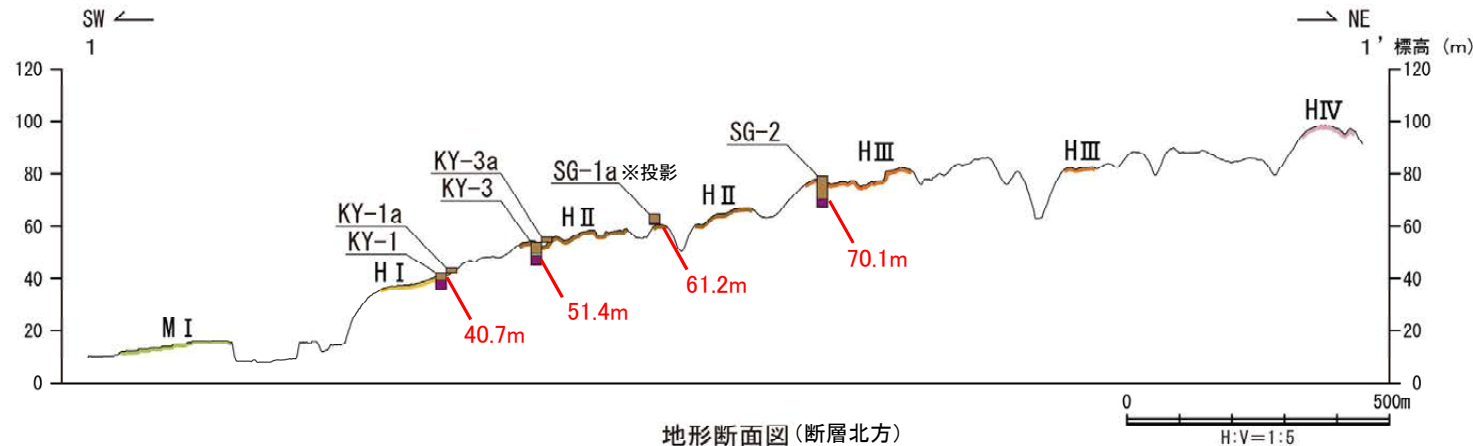
富来川南岸断層北方の高位段丘面調査結果

○断層北方の高位段丘面について調査を実施した結果、旧汀線高度は高位段丘Ⅰ面が約40m、高位段丘Ⅱ面が約60m、高位段丘Ⅲ面が約70m以上と推定された。



調査位置図

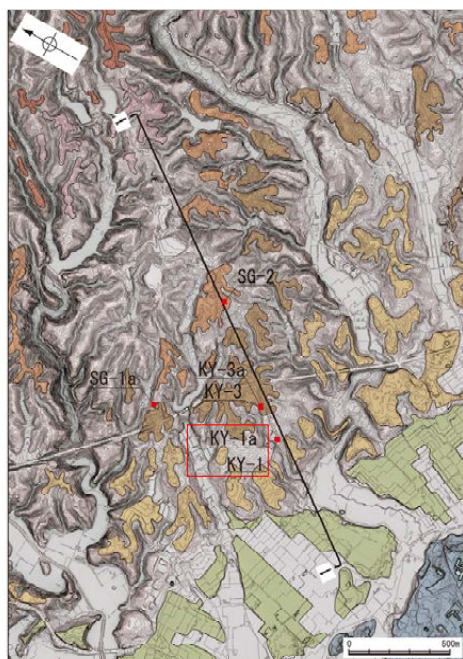
調査位置図(詳細)



地形断面図(断層北方)

ボーリング調査KY-1孔, 露頭調査KY-1a

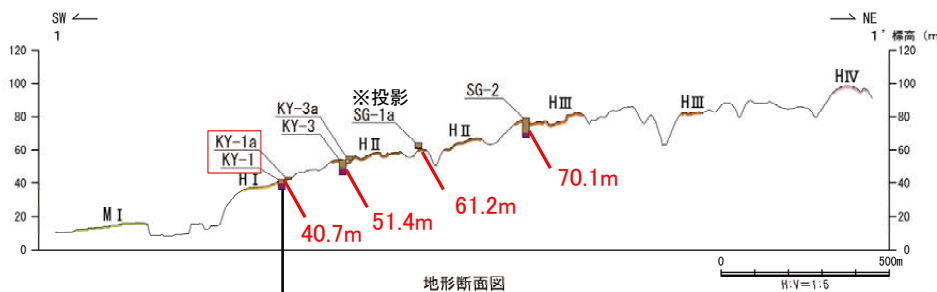
○高位段丘 I 面に隣接する地点におけるボーリング調査 (KY-1 孔), 露頭調査 (KY-1a) の結果, 基盤岩の上面標高の上面標高は40.7mであり, 本地点はH I 面の段丘内縁に近接することから, これが旧汀線高度に相当する。



調査位置図

テフラの年代 (町田・新井, 2011)

AT: 2.8万~3万年前
K-Tz: 9.5万年前

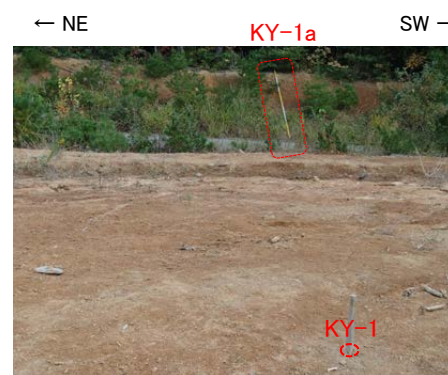


地形断面図

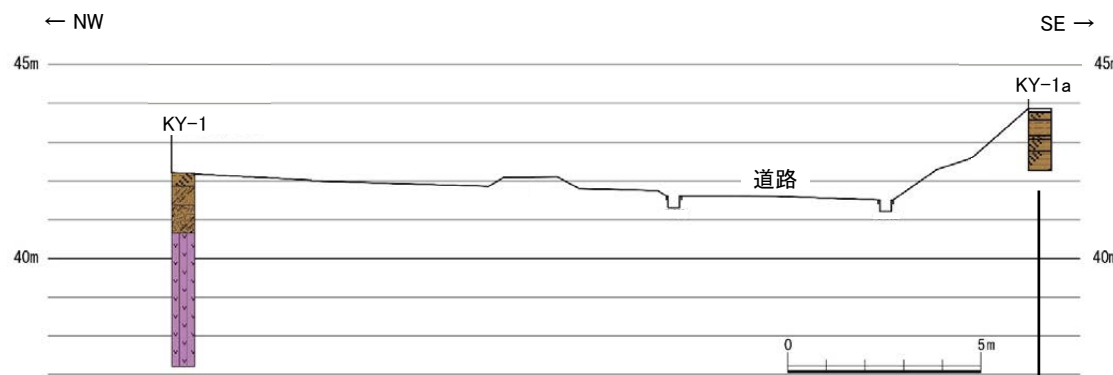


70.0m 基盤岩, 海成堆積物の上面標高

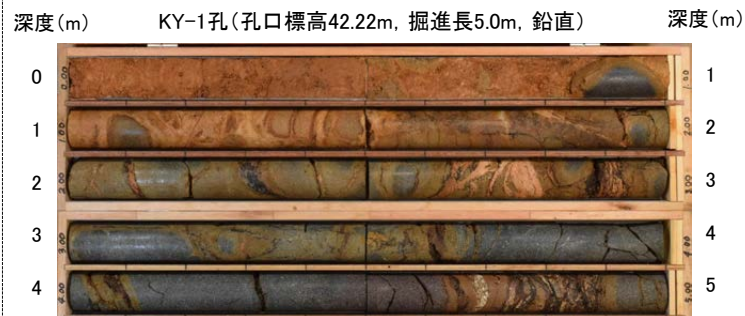
KY-1 孔に加え, 付近の露頭調査 (KY-1a) によりデータを補完した。



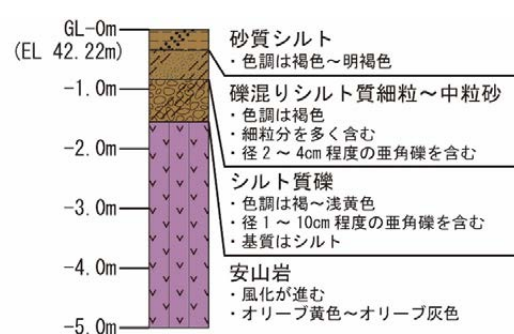
調査地点周辺状況写真



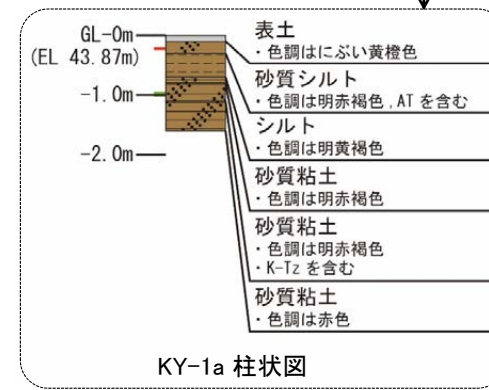
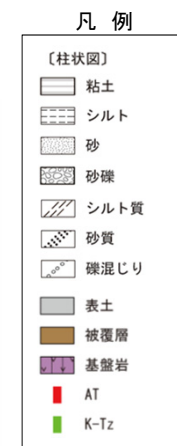
調査地点周辺の地形断面図



KY-1 孔 コア写真



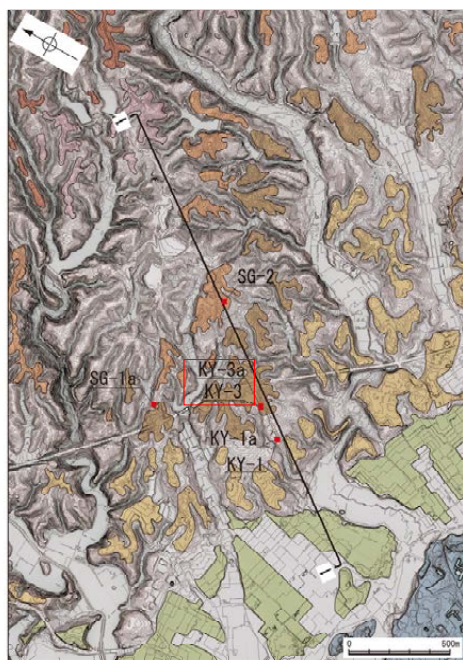
KY-1 孔 柱状図



KY-1a 柱状図

ボーリング調査KY-3孔, 露頭調査KY-3a

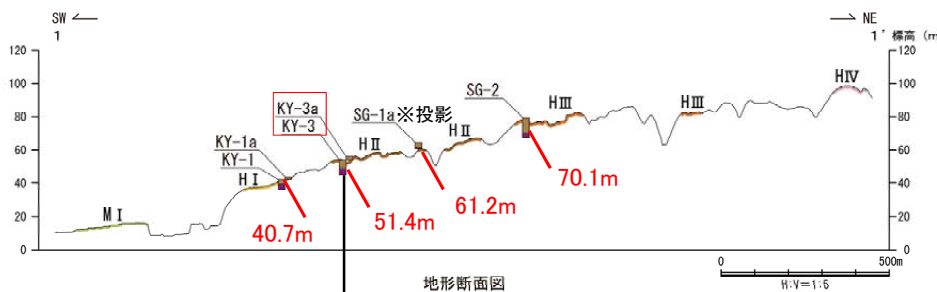
○高位段丘Ⅱ面の前縁付近におけるボーリング調査(KY-3孔), 露頭調査(KY-3a)の結果, 基盤岩直上にシルト質礫層が認められ, これは海成堆積物と考えられる。この上面標高は51.4mであることから, 高位段丘Ⅱ面の旧汀線高度はこれ以上と考えられる。



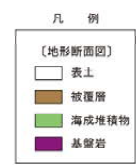
調査位置図

テフラの年代(町田・新井, 2011)

AT: 2.8万~3万年前
K-Tz: 9.5万年前
SK: 10.5万年前



地形断面図

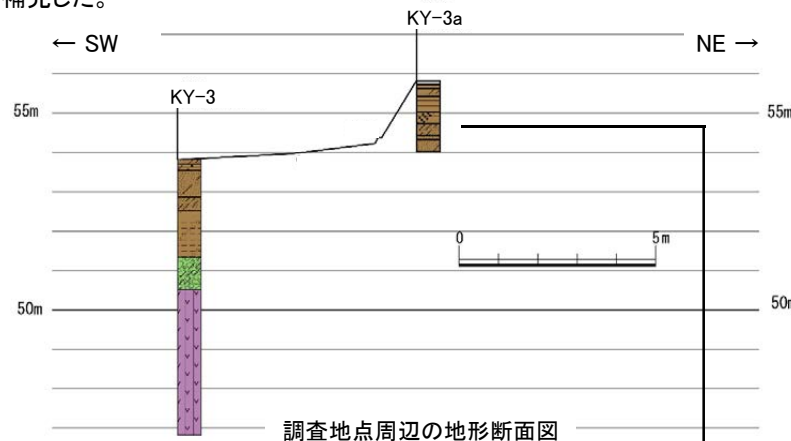


70.0m 基盤岩, 海成堆積物の上面標高

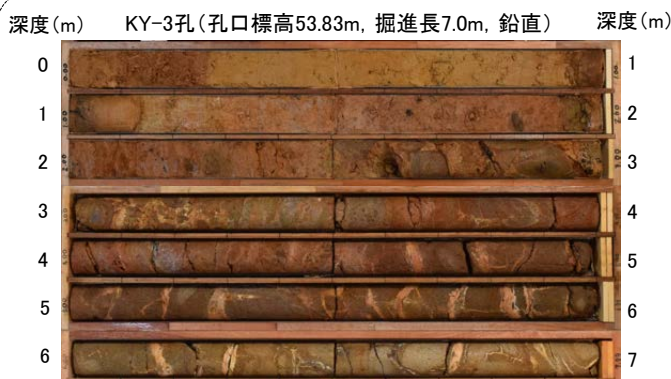
KY-3孔に加え, 付近の露頭調査(KY-3a)によりデータを補完した。



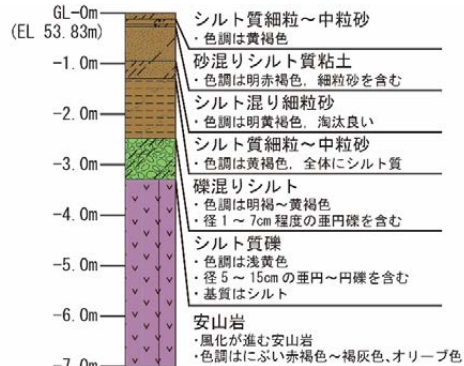
調査地点周辺状況写真



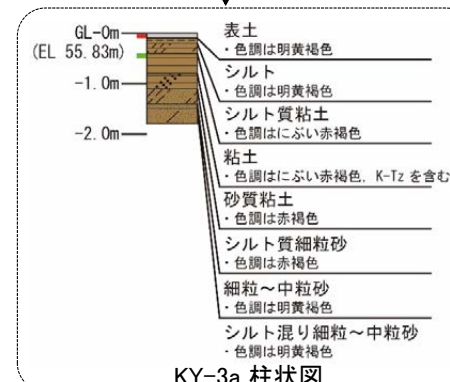
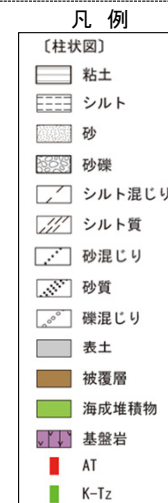
調査地点周辺の地形断面図



KY-3孔 コア写真



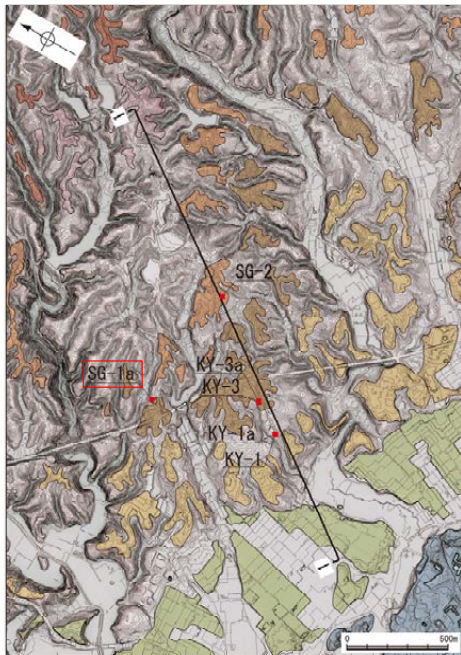
KY-3孔 柱状図



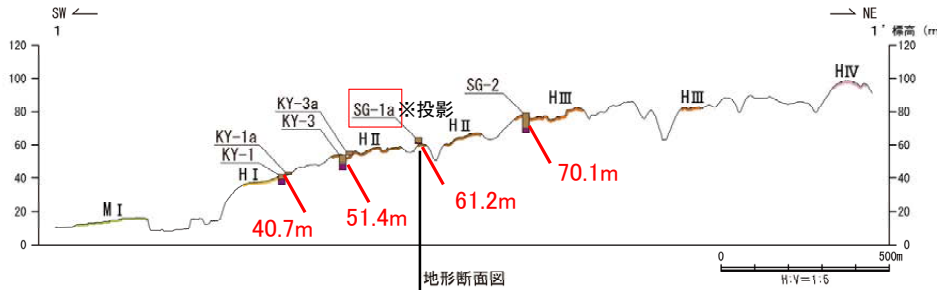
KY-3a 柱状図

露頭調査SG-1a

○高位段丘Ⅱ面の段丘面内縁付近における露頭調査(SG-1a)の結果、基盤岩の上面標高は61.2mである。本地点は段丘面内縁付近に位置することから、この上面標高が旧汀線に相当すると考えられる。



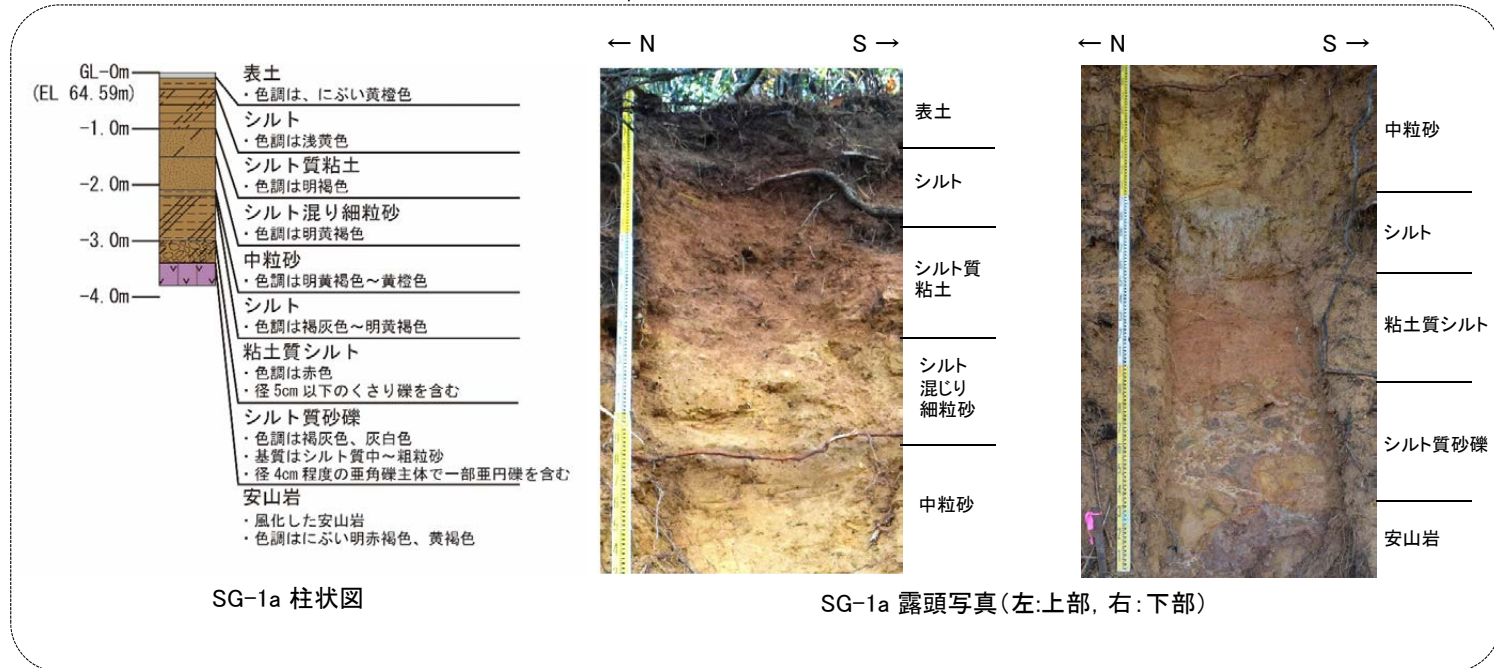
調査位置図



地形断面図



70.0m 基盤岩、海成堆積物の上面標高

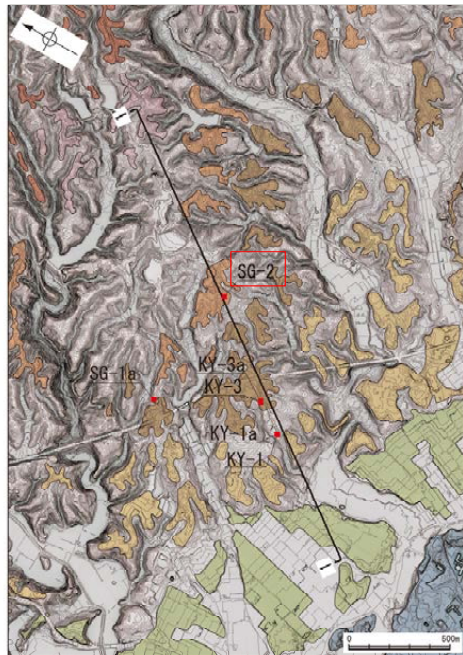


テフラの年代(町田・新井, 2011)

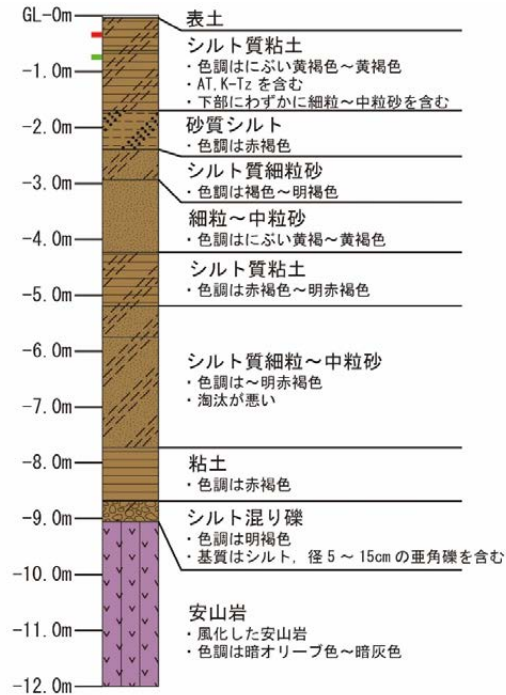
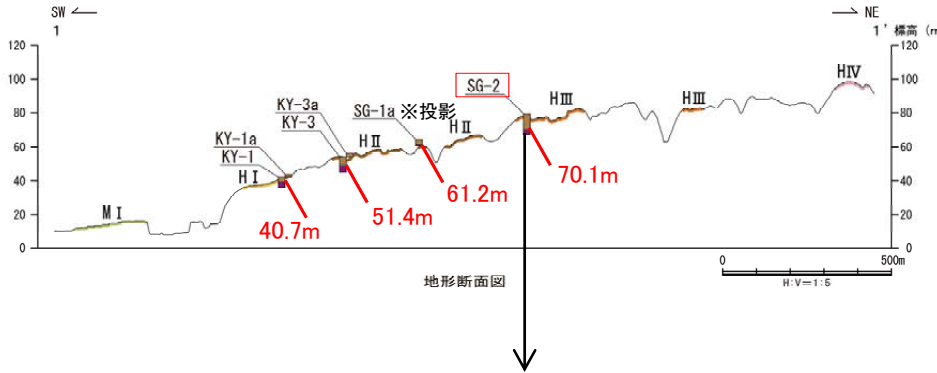
AT: 2.8万～3万年前
K-Tz: 9.5万年前

ボーリング調査SG-2孔

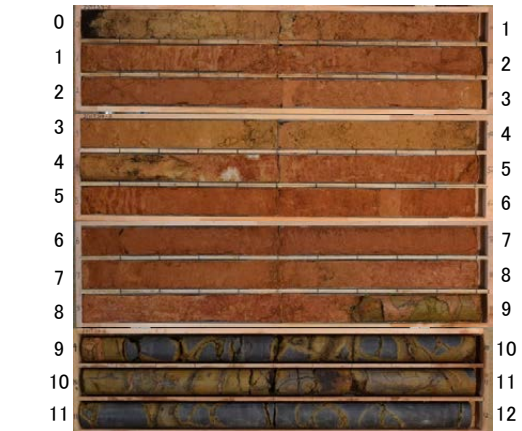
○高位段丘Ⅲ面におけるボーリング調査(SG-2孔)の結果, 基盤岩の上面標高は70.1mである。本地点は段丘面前縁付近に位置することから, 旧汀線高度は70.1mより高いと考えられる。



調査位置図



SG-2孔 (孔口標高79.18m, 掘進長12.0m, 鉛直)



SG-2孔 コア写真

テフラの年代(町田・新井, 2011)

AT: 2.8万~3万年前
K-Tz: 9.5万年前

余白

参考文献

- 青木かおり・町田洋(2006):日本に分布する第四紀後期広域テフラの主元素組成-K2O-TiO2図によるテフラの識別,地質調査研究報告,57,239-258.
- Bronk Ramsey, C.(2009): Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360.
- 古澤明・中村千怜(2009):石英に含まれるガラス包有物の主成分分析によるK-Tzの識別,地質学雑誌,115,10,544-547.
- 浜田昌明・野口猛雄・穴田文浩・野原幸嗣・宮内崇裕・渡辺和樹・山口弘幸・佐藤比呂志(2007):2007年能登半島地震に伴う地殻変動と能登半島の海成段丘,東京大学地震研究所彙報,82,345-359.
- 服部貴志・浜田昌明・高山陶子・小野田敏・坂下学・山口弘幸・平松良浩(2014):古砂丘・古期扇状地に関する空中写真を活用したDEM解析による地形特性の検討,地形,35,4.
- Heaton, T. J., Köhler P., Butzin, M., Bard, E., Reimer, R. W., Austin, W. E. N., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Hughen, A. K., Kromer, B., Reimer, P. J., Adkins, J., Burke, A., Cook, M. S., Olsen, J., and Skinner, L. C.(2020): Marine20-The radiocarbon age calibration curves (0-50,000years cal BP), Radiocarbon, 62(4), 779-820.
- 池田安隆・今泉俊文・東郷正美・平川一臣・宮内崇裕・佐藤比呂志(2002):第四紀逆断層アトラス,東京大学出版会.
- 井上卓彦・尾崎正紀・岡村行信(2010):能登半島北部域20万分の1海陸シームレス地質図及び断面図,海陸シームレス地質情報集,「能登半島北部沿岸域」,数値地質図S-1,産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 上嶋正人・木川栄一・駒澤正夫(2002):能登半島東方・重力異常図・磁気異常図説明書, no.59(CD), 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 上嶋正人・石原文実・木川栄一・駒澤正夫(2007):能登半島西方重力異常図・磁気異常図説明書, no.61(CD), 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 紮野義夫(1993):石川県地質誌新版・石川県地質図(10万分の1)説明書,石川県・北陸地質研究所.
- 小池一之・町田洋(編)(2001):日本の海成段丘アトラス,東京大学出版会.
- 町田洋・新井房夫(2011):新編火山灰アトラス[日本列島とその周辺](第2刷),東京大学出版会.
- 長橋良隆・佐藤孝子・竹下欣宏・田原敬治・公文富士夫(2007):長野県,高野層ボーリングコア(TKN-2004)に挟在する広域テフラ層の層序と編年,第四紀研究,46-4,305-325.
- 日本地形学連合(編)(2017):地形の辞典,朝倉書店.
- 日本地質学会編(2006):日本地方地質誌4 中部地方,朝倉書店.
- 野原幸嗣・野口猛雄・穴田文浩・浜田昌明・小野田敏・沼田洋一・山野芳樹・鈴木雄介・佐藤比呂志(2007):航空レーザ計測による2007年能登半島地震の地殻変動,地震研究所彙報,82,321-331.
- 岡村行信(2002):20万分の1能登半島東方海底地質図及び同説明書,海洋地質図, no.59(CD), 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 岡村行信(2007):20 万分の1能登半島西方海底地質図及び同説明書,海洋地質図, no.61(CD), 産業技術総合研究所地質調査総合センター.
- 太田陽子・平川一臣(1979):能登半島の海成段丘とその変形,地理学評論,52-4,169-189.
- 太田陽子・国土地理院地理調査部(1997):「能登半島」1:100,000,地殻変動土地条件図,国土地理院技術資料, D.1-No.347.
- 斎藤文紀(1988):沿岸域の地形や堆積物と波浪作用限界水深の関係,月刊 地球,10,7,458-466.
- 佐々木俊法・後藤憲央・岩森暁如・原田暁之・市川清士・松島義章・佐藤武宏・柳田誠・杉森辰次・東田優記・重光泰宗・田中裕(2015):詳細な生物遺骸群集の観察に基づく若狭湾周辺における地震性地殻変動,日本第四紀学会講演要旨集,45,17.
- 杉戸信彦・堤 浩之(2010):1:25,000 都市圏活断層図,邑知潟断層帯とその周辺「邑知潟」「邑知潟西南部」解説書,国土地理院技術資料, D・1-No.561,国土地理院.